

学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

- DP 1健康科学分野において高度な倫理観と専門的な知識・技能を修得し、科学的な方法論に基づく実証的研究を遂行し、その成果を実践に応用できる。
- DP 2健康科学に関連する倫理的な課題を深く理解し、生命の尊厳、人権の保護、公平性といった倫理的価値を重視した行動を通じて、個人および社会全体の健康増進に寄与できる
- DP 3幅広い教養と高度な専門知識・技能を兼ね備えた高度専門職業人として、社会が直面する健康課題に対して実践的かつ創造的な解決策を提案し、実行することで社会に貢献できる。
- DP 4専門分野において継続的に学び続け、絶えず変化する社会のニーズに柔軟に適応しながら、専門性をさらに深化させることができる。
- DP 5専門知識や研究成果を効果的に伝える優れたコミュニケーション能力を備え、他職種連携や学際的チームで協働し、課題解決に向けて具体的な成果を創出できる。

◎：DP達成のために、特に重要な事項

○：DP達成のために、重要な事項

便覧 掲載 順番	科目群	科目名	単位数	科目区分	主要科目	アクティブラーニング型授業	PBL型授業	高度なDX	科目概要	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4	DP 5
1	共通科目	健康科学総合特論	2	必修		○	○		国際生活機能分類（ICF）の枠組みを用いて、健康を「心身機能・身体構造」「活動」「参加」「環境因子」「個人因子」の側面から多角的に捉える「健康科学モデル」を学修する。複数領域の専門性を統合し、議論やケーススタディを通じて現場の課題解決能力を養うことを目的とする。幅広い視点を獲得し、学際的連携に基づく実践的な問題解決を可能にする力を培う。			◎		
2	共通科目	健康科学特論I	2	選択		○	○		神経系疾患・運動器疾患・内部障害系疾患・心血管疾患などにより生じる日常生活活動低下を事例として取り上げ、国際生活機能分類（ICF）の視点から問題点を把握し、「健康科学モデル」に基づく解決方法を学修する。徒手療法や装具療法を含む多様なアプローチを検討し、討論・発表を通じて実践的な問題解決能力を培い、研究テーマ設定にもつなげる。			◎		
3	共通科目	健康科学特論II	2	選択		○	○		国際生活機能分類（ICF）の「心身機能・身体構造」を中心に、疼痛・筋力低下・筋萎縮・関節可動域制限・アライメント異常などの運動機能障害の理解を深め、評価と治療方略を体系的に検討する。さらに、歩行や立ち上がりといった基本動作をバイオメカニクスの視点で分析し、最新文献の批判的レビューや発表・討論を通じて、科学的根拠に基づく問題解決力と研究遂行力を涵養する。	◎		○		
4	共通科目	健康科学特論III	2	選択		○	○		超高齢社会における健康寿命延伸を目指し、高齢者の身体・認知機能の特性や姿勢制御・移動能力低下のメカニズムを理解するとともに、認知機能低下予防や地域診断、ソーシャルキャピタル、ユニバーサルデザイン（7原則）を用いた地域づくりについて学修する。さらに、調査・発表・討論を通して多職種協働や科学的根拠に基づく介護予防の実践力を涵養する。	○		◎		
5	共通科目	健康科学特論IV	2	選択		○			個人因子としての心理・発達・学習を中心に、身体・知覚・認知・言語・社会性など人を構成する主要側面の生涯発達を概観する。文献・抄読や事例検討を通じて、発達や学習、心理的側面が人の健康に及ぼす影響を科学的・専門的に探究する方法を学び、健康科学と教育の実践に活かせる基礎的知識と研究課題を考察する力を養う。	◎			○	
6	共通科目	健康科学特論V	2	選択		○			現代社会には健康に関する多様な情報が流通しているが、その正確性や科学的根拠が不明確な場合も少なくない。本科目では、健康の概念と現状を多角的に理解し、統合医療や補完代替医療、健康食品、健康増進施策などを取り上げ、科学的資料の批判的分析を通じて正しい情報を見極める力を養う。さらに、QOL向上の観点から人々の健康を支援する医療職の役割を探究し、実践に活かせる包括的支援方法を考察する。	○		◎		
7	共通科目	健康科学特論VI	2	選択					基礎医学の観点から「食」と「くすり」を総合的に学び、健康三原則や我国の栄養課題、非感染性疾患の食事療法、食品と医薬品の相互作用を理解する。さらに、細胞や生体を構成する物質、遺伝情報の発現など生命科学の基礎、薬物動態・薬力学に関する仕組みを学修し、科学的根拠に基づいて健康課題へ適切にアプローチする判断力と、安全で効果的な薬物療法を支える基盤的能力を養う。			◎		
8	共通科目	健康科学特論VII	2	選択		○			感染症の発生メカニズムや感染経路、標準予防策、医療関連感染のリスク管理、抗菌薬耐性対策を学ぶ。さらに、ワクチン・免疫の基礎、感染症サーベイランス、アウトブレイク対応、地域社会における感染対策や国際的動向を理解し、倫理的課題も考察する。実践的な感染制御を体系的に習得し、医療現場や公衆衛生で活かせる力を養う。	◎	○	○		
9	健康科学基盤科目	実践カウンセリング特論	2	選択		○			保健・医療・福祉の現場で心理的支援を行う上で必要となる、カウンセリングの原理や技法、援助者の態度、倫理的視点について学ぶ。講義に加えて、映像教材やロールプレイなどの実践的演習を組み合わせることで、傾聴・共感・問題解決・実行計画支援といった技法を実際の臨床場面で活用できる力を養い、臨床家としての専門性を高める。		○			◎
10	健康科学基盤科目	マネジメント特論	2	選択		○	○		保健医療マネジメントの理論と実践を多視点から学ぶ。組織論・人材マネジメント・リーダーシップ、国内外の政策、地域包括ケア、医療の質評価・医療安全を扱い、議論とレポートを通じて現場改善と政策提言に資する分析力・実行力を涵養する。外部講師との協働を通じ、実例に基づく意思決定とリスクマネジメントの枠組みを統合する。		○			◎
11	健康科学基盤科目	地域包括ケア特論	2	選択		○	○		団塊の世代が後期高齢者となる時代において、住み慣れた地域で安心して暮らせる地域包括ケアシステムを多面的に学ぶ。国の方針や各自治体の介護保険事業計画を踏まえ、地域特性・専門職の役割・多職種連携を理解する。さらに、地域診断や介護予防事業の事例検討を通じて健康課題を抽出し、住民と協働してシステムを構築するための研究方法を探求する。実践的な発表・討論を通して地域での実践力を養成する。	◎	○			
12	健康科学基盤科目	バイオサイエンス技術特論	2	選択		○	○		薬理作用の理解に資する生命科学の基盤を体系的に学ぶ。細胞・組織・器官の階層構造、免疫と情報伝達、細胞周期・分化・細胞死、がん化・老化、恒常性・神経機構を扱う。さらにエコーやCT、組織学、クローニング/サブクローニング、in silico解析など基礎医学技術を概説し、医薬品作用を科学的に説明し得る力を養う。	◎		○		

学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

- DP 1健康科学分野において高度な倫理観と専門的な知識・技能を修得し、科学的な方法論に基づく実証的研究を遂行し、その成果を実践に応用できる。
- DP 2健康科学に関連する倫理的な課題を深く理解し、生命の尊厳、人権の保護、公平性といった倫理的価値を重視した行動を通じて、個人および社会全体の健康増進に寄与できる
- DP 3幅広い教養と高度な専門知識・技能を兼ね備えた高度専門職業人として、社会が直面する健康課題に対して実践的かつ創造的な解決策を提案し、実行することで社会に貢献できる。
- DP 4専門分野において継続的に学び続け、絶えず変化する社会のニーズに柔軟に適応しながら、専門性をさらに深化させることができる。
- DP 5専門知識や研究成果を効果的に伝える優れたコミュニケーション能力を備え、他職種連携や学際的チームで協働し、課題解決に向けて具体的な成果を創出できる。

◎：DP達成のために、特に重要な事項

○：DP達成のために、重要な事項

便覧 掲載 順番	科目群	科目名	単位数	科目区分	主要科目	アクティブラーニング型授業	PBL型授業	高度なDX	科目概要	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4	DP 5
13	健康科学基盤科目	臨床工学特論	2	選択		○	○		臨床工学に関わる最新医療技術の基盤を学ぶ。ドラッグデリバリーシステムや抗体医薬の原理と応用、ワクチンの種類と疾患予防効果、再生医療や免疫療法の基礎を理解する。加えて、放射線・磁場・電磁波を用いた医療機器の原理、画像診断や生体計測法などの応用技術について講義を行い、先端医療技術を科学的に捉える力を養う。	◎		○	○	
14	健康科学基盤科目	ウィメンズヘルス特論	2	選択		○	○		女性のライフサイクルに沿った健康課題を理解し、専門職として必要な基礎能力を養う。セクシュアリティやリプロダクティブ・ヘルスを起点に、思春期・成熟期・更年期・老年期の心身の問題を学ぶ。家族計画や不妊、がん、DV、メンタルヘルスなどの支援方法を検討し、理学療法的支援も含めて包括的に女性の健康を支援する力を培う。		◎			
15	健康科学基盤科目	教育学特論	2	選択					教育をめぐる哲学的背景の理解を起点に、教育心理学の基礎を体系的に学ぶ。発達段階や学習理論、動機づけや記憶、学習方略、教育評価などを通して、子どもの発達と学習を支援する知識を修得する。さらに、授業形態や適性処遇、障害のある子どもの学習支援について考察し、教育場面での教授・学習方法を実践的に理解する。最終的に、教育現場に活かせる心理学的知識と応用力を養うことを目指す。	◎			○	
16	研究基礎科目	統計学基礎特論	2	必修		○	○		学術論文の理解や臨床での疑問を研究デザインに落とし込むために必要な基礎的統計手法を学ぶ。講義に加え、研究論文の抄読や演習を組み合わせ、記述統計・仮説検定・回帰分析・多重比較などを実際に用いる。さらに、研究デザインやシステマティックレビューの読み方を学び、臨床での疑問を統計的に解決する方法を考察する。最終的に、自ら研究課題を設定し、統計解析を実践できる力を養う。	◎				○
17	研究基礎科目	研究方法特論	2	必修		○	○	○	臨床研究を進める上で必要となる研究倫理、研究の基本構造や種類、研究計画の立案から論文作成に至るプロセスを体系的に学ぶ。質的研究・量的研究・実験的研究の特徴を理解し、研究対象者の定義やサンプリングの方法を修得する。また、先行文献の検索や文献クリティークを通じて批判的に論文を読む力を養う。最終的には、研究計画書や論文を作成する基礎力を培い、研究者としての倫理的判断力と実践的スキルを高める。	◎		○		
18	専門科目	健康薬科学特論	2	必修		○	○		人の健康とQOL向上に寄与する基礎医学領域を対象に、各教員の専門分野を通じて基礎概念から先端研究動向までを学ぶ。食生活評価、栄養介入、遺伝子工学によるワクチン作成技術、抗原抗体反応を用いた検出システムなど具体例を取り上げ、研究手法や応用可能性を理解する。これにより、健康課題解決に資する発想力を培い、今後の研究推進に必要な実践的知識と柔軟な思考力を身につけることを目指す。	◎			○	
19	専門科目	健康薬科学演習	4	必修		○			「健康薬科学特論」で得た知見を土台に、各自の研究課題を討論と演習・実習で深掘りする。腸内環境評価、栄養評価・統計解析、遺伝子工学（PCR・電気泳動等）、抗原抗体法（WB・ELISA・フロー）を体験し、課題定義→仮説→方法選択→実施→結果検討の循環を実践。科学的根拠に基づく問題解決力と再現性の高い実験計画・データ解釈力を養う。	◎		○		
20	専門科目	臨床看護学特論	2	必修		○			臨床で直面する患者・家族の問題を多面的（身体・心理・社会）に分析し、QOL向上に資する看護援助を理論と実践の両面から検討する。急性期・慢性期・成人期の事例検討に加え、生体反応指標を用いたデータ収集・分析を実施し、得られた知見を発表・討議して研究課題を明確化する。科学的・専門的看護技術の創出や質向上的方法論理解を深め、エビデンスに基づく看護実践の基盤を涵養する。	◎				○
21	専門科目	臨床看護学演習	4	必修		○			、臨床看護学特論や健康科学特論で得た知識を基盤に、看護研究・看護実践における生体反応指標、面接法、尺度の活用方法を学び、実際にデータ収集・分析を行う。研究論文のクリティークを通じて量的・質的・介入研究など多様な研究手法の特徴や信頼性・妥当性を理解し、臨床現場での課題に即した研究計画を立案・実施できる力を養う。討論や発表を重ね、研究成果を臨床へ還元する視点を培う。	○				◎
22	専門科目	生涯発達学特論	2	必修		○	○		健康科学特論Ⅳで学んだ発達・心理の基礎を土台に、誕生から死に至るまでの各ライフステージに応じた心身の発達課題や健康課題を学習する。エリクソンやピアジェなどの発達理論を活用し、臨床事例を多面的に分析・討論することで対象理解を深める。さらに、アセスメント技法や多職種連携、制度理解、倫理的配慮を踏まえ、生涯発達を支援する実践的視点を涵養する。	◎	○			
23	専門科目	生涯発達学演習	4	必修		○	○		健康科学特論Ⅳ・生涯発達学特論の学びを基盤に、ライフステージごとの発達課題と健康課題を扱い、支援方法を理論・エビデンスに基づき検討する。文献抄読や事例討論、学術的探究を通じて、主体的に臨床支援計画を立案し、多職種連携の視点から洗練させる。最終的に健康科学モデルに基づき、人の発達と幸福の追求に向けたアプローチを構築する力を養う。			◎		○
24	専門科目	臨床リハビリテーション学特論	2	必修		○	○		日常生活活動（ADL）低下を「健康科学モデル」で捉え、神経・運動器・内部障害・心血管疾患などの症例（動画含む）を用いて原因分析から介入方略（装具療法・徒手療法）までを理論と実践の両面で検討する。各回で方略→実践→再考察を繰り返し、最終回で統合プレゼンを行うことで、問題解決能力と実装可能なリハ計画立案力を養う。				◎	

学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

- DP 1健康科学分野において高度な倫理観と専門的な知識・技能を修得し、科学的な方法論に基づく実証的研究を遂行し、その成果を実践に応用できる。
- DP 2健康科学に関連する倫理的な課題を深く理解し、生命の尊厳、人権の保護、公平性といった倫理的価値を重視した行動を通じて、個人および社会全体の健康増進に寄与できる
- DP 3幅広い教養と高度な専門知識・技能を兼ね備えた高度専門職業人として、社会が直面する健康課題に対して実践的かつ創造的な解決策を提案し、実行することで社会に貢献できる。
- DP 4専門分野において継続的に学び続け、絶えず変化する社会のニーズに柔軟に適応しながら、専門性をさらに深化させることができる。
- DP 5専門知識や研究成果を効果的に伝える優れたコミュニケーション能力を備え、他職種連携や学際的チームで協働し、課題解決に向けて具体的な成果を創出できる。

◎：DP達成のために、特に重要な事項

○：DP達成のために、重要な事項

便覧 掲載 順番	科目群	科目名	単位数	科目区分	主要科目	アクティブラーニング型授業	PBL型授業	高度なDX	科目概要	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4	DP 5
25	専門科目	臨床リハビリテーション学演習	4	必修		○	○		神経・運動器・内部障害・心血管など多様な疾患の症例を対象に、日常生活活動（ADL）低下を具体化し、健康科学モデルを基盤に原因分析から介入設計へと展開する。装具療法・徒手療法や各種評価機器（超音波・表面筋電・重心動揺）を活用した演習を重ね、実践と研究を結びつけることで、修士論文作成に資する科学的問題解決能力と臨床応用力を養う。			◎		
26	専門科目	地域系リハビリテーション学特論	2	必修		○	○	○	健康科学特論Ⅲで学んだ介護予防の基礎を土台に、フレイル、ロコモティブシンドローム、サルコペニア、軽度認知障害の予防と評価方法を学ぶ。さらに、地域在住高齢者の身体・認知機能低下を防ぐ方策、ICTを活用した介護予防事業の現状と課題、ソーシャルキャピタルや地域診断の手法を体系的に理解する。住民主体の地域づくりを重視し、地域リハビリテーションを推進する専門的能力を養成する。			◎	○	
27	専門科目	地域系リハビリテーション学演習	4	必修		○	○	○	地域特論の学びを土台に、通いの場の実地見学や訪問リハビリテーションのグループワークで在宅高齢者の課題を抽出・評価。さらに国勢調査・JSTAT・商圏分析等のデータで地域資源と健康課題を可視化し、個別支援からポピュレーションアプローチまでを統合した介護予防計画を、多職種・住民・行政と連携して立案・発表する力を養う。			◎		○
28	専門科目	運動機能障害系リハビリテーション学特論	2	必修		○	○		学童期から高齢者までの運動機能障害を対象に、その評価・治療戦略を多面的に学ぶ特論である。生体工学に基づく計測技術、臨床推論と治療戦略、運動療法（レジスタンス・ストレッチ）、歩行のバイオメカニクス、スポーツ障害の評価とリハビリテーションを通じて、運動機能とQOLの関連を理解する。さらに、臨床現場での課題を発表・討論することで、今後の研究や実践に応用できる能力を涵養する。	○		◎		
29	専門科目	運動機能障害系リハビリテーション学演習	4	必修		○	○		運動機能障害系リハビリテーション学特論で学んだ理論を基盤とし、演習形式で実践的に学ぶ授業である。筋電図・近赤外線分光法・超音波画像診断・等速性運動機器などを用いた評価法を体験的に理解するとともに、スポーツ障害や加齢・生活習慣病に伴う運動機能障害に対する改善策を多面的に検討する。さらに臨床や研究の視点から、自らの課題に基づいた方策や計画を提案する実践力を養成する。			○	◎	
30	専門科目	感染制御学特論	2	必修		○	○		感染制御の基本原則から最新動向まで体系的に学び、感染症の病因・病態生理、院内感染対策、抗菌薬管理、アウトブレイク対応、環境管理、ワクチン戦略など臨床現場に直結する高度な知識を習得する。国際的ガイドラインや法規制、職業感染予防、倫理的課題も取り上げ、エビデンスに基づく感染管理の実践力を養うとともに、新技術や今後の展望を議論し、感染制御のリーダーシップを発揮できる人材の育成を目指す。	◎	○	○		○
31	専門科目	感染制御学演習	4	必修		○	○		感染制御の理論と実践を基盤に、標準予防策や手指衛生、環境・医療機器の管理、ワクチンと免疫管理、抗菌薬適正使用を体系的に学ぶ。さらに、院内感染サーベイランスやアウトブレイク対応、職業感染予防、法規制・倫理課題、国際的なガイドラインの比較、多職種連携の重要性を含む幅広い領域を扱う。ケーススタディや演習を通して実務に直結する感染管理能力とリーダーシップを養成する。		○	○		◎
32	特別研究	特別研究	10	必修		○	○		各自の専門領域における課題を研究テーマとして設定し、研究計画の立案から倫理審査、データ収集・解析、成果の論文化までを系統的に経験する。指導教員および指導補助教員の助言を受けながら、科学的・論理的思考に基づいた研究活動を遂行し、修士論文の作成を通じて高度な専門的知識と研究能力を修得する。さらに、臨床現場の課題解決に資する学術的成果を創出する実践力を養う。	◎		○		